

2022年5月1日 説教』どこに花を植えるのか』

高橋克樹牧師

聖書 エゼキエル書34章1〜16節、ヨハネ福音書10章7〜18節

ヨハネ福音書10章1〜18節の聖書箇所は、9章との関連があります。9章41節で、イエスはファリサイ派の人々に、「見えると言ひ張るところにあなた方の罪が残る」と言っていることを受けて、イエスは「羊の囲い」「自分は良い羊飼ひ」という話を始められるのです。イエスがファリサイ派の人たちに対して強い口調で、「見えると言ひ張るところに罪がある」（口語訳）と言ったのは、なぜか。それは9章34節で彼らが生まれつき盲人の人を追い払ったことと関連があります。イエスが盲人を癒してその目を見えるようにしたこと、論争が起こり、ファリサイ派の人たちはその盲人をイエスがどのような業で癒したかの行為の部分だけを切り取り、目を癒した恵みの事実は不問にして、イエスを罪人にするために尋問を再び始めたのです。ところが、その盲人がファリサイ派の人たちに対して「神は罪人の言うことはお聞きにならないと、私たちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことはお聞きになります」（31節）と言つて、ファリサイ派の人たちの矛盾点を突きます。そして、イエスが神のもとから来られた方であることを信仰告白するのですが、それを聞いたファリサイ派の人たちは、この盲人だった人に対して、『お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか』（9章34節）と叱責して、彼を外に追い出してしまふのです。

このことを受けて、10章1節以下でイエスは、羊の囲いに入るのに門を通つて入らない者は盗人や強盗であると言ひ、羊をケアする羊飼ひのアイデンティティについて語ります。

羊の囲いに入るのは羊飼ひであつて、そのことは門番が彼の為に門を開けることによつて確認できるというのです。当たり前のことです。羊飼ひは羊の声によつて、その一頭一頭ずつの名前を呼んで、羊はその声の主を知っているのです、この親密な関係性に基づいて、羊飼ひに羊はついていくのです。当時、羊飼ひは羊一頭一頭に名前を付けていました。羊にも顔相があつて、家畜を飼つたことがないと分からないかもしれませんが、人間が一人一人顔も性格も違ふように、羊もそれぞれの個体ごとに顔も性格も違つてい

るところがファリサイ派の人たちは、羊の囲いの話が全くわかりません。そこで、7節以下で、イエスが「わたしは羊の門である」という話を展開していくのです。門であるイエスを通して囲いの中に入る者は救われると言ひます。そして、「わたしは良い羊飼ひである」と宣言して、その良い羊飼ひであるイエスは、羊のために命を捨てると言ひます。伝統的にイスラエルでは神は羊飼ひ、神の民は羊と理解されてきました。そのことを理解するためには、エゼキエル34章15節が重要です。この箇所は、宗教改革者であるブツァーが最も大切にしていた聖書箇所です。『わたしは失われたものを尋ね求め、追われたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、弱つたものを強くする。しかし、肥えたものと強いものを滅ぼす（別の訳は『滅ぼす』を「監督する」と訳します）。わたしは公平をもつて彼らを養ふ』。ブツァーはここに牧会者の5つの職務を見出しています。①教会から離れている者をキリストに連れ戻すこと、②迷ひ出て行つた者を導き帰すこと、③罪に陥つた者のうちに命を回復させること、④病弱なキリスト者を強めること、⑤強い完全なキリスト者を監督し、すべての善において前進させること々の5つです。彼は特に34章16節の「傷ついたもの」というのは、教会の中で引き裂かれ、傷つき、身体と心の罪で内面的に悩んでいる教会員のことだと理解しました。

<sup>1</sup> またブツァーは彼らをいたわり癒す義務はすべてのキリスト者にあると考えまし

た。キリスト者は牧師の指示により自分の隣人に対して、その傷ついた者を「包む」とをしなければならず、この任務は特に魂の癒しのために任職された牧師に委ねられていると考えました。また、マタイ福音書18章15節で『兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい（エレグゼイン）。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる』という個所に注目して、「忠告する」と訳されているエレグゼインが本来「明確に他の者に示すこと」を意味していると解釈し、忠告するとは、率直にその人にある罪を知らせることが大切だと考えました。つまり、自らの罪を告白し、神に赦しを求め、悔い改めて新しく生きるように導くことがキリスト者の使命であると考えたのです。ただし、罪を知らせるときは愛と柔和をもって接しなければならぬと考えました。ブツァーの牧会論においては「どのようにして信仰の弱い者を強くするか」が大切な課題でした。そして、健全な教会員を育てるのは牧師だけの業ではなく、すべての教会員の業であると考えました。

さて、エゼキエル書34章の冒頭で「お前たち」と批判されているのはイスラエルの王たちのことです。彼らは悪い羊飼いで羊の群れを守らずに危険にさらしていると断罪しています。一方、神は良い羊飼いで、彼らを回復させて守るのです。ヨハネ福音書10章の比喻を、このエゼキエル書の文脈で読むと、イエスが強盗、盗人、知らない者と言ったのは、ファリサイ派の人たちのことを指していることは明らかです。しかし、ここで注意したいことは、ファリサイ派の人たちはまじめで正しい人なのです。彼らは生まれつき目が見えない人を断罪して自分たちの囲いであるユダヤ教の社会から追放しようとしたが、イエスの時代において、その行為は誰も非難できない正しい判断であり、行為であったのです。障害を持つている者は罪を犯した者だからです。異端者を排除することで、囲いの中の者を守ろうとしたのでした。

生まれつき目の見えない人の目を見えるようにしたイエスの恵みの業と、目が見えるようになった人間がユダヤ教社会に復帰して平穏な生活ができるようになったことを、この癒された盲人と一緒に喜ぶことができないファリサイ派の人たちは自分たちの本来的な役割を忘れた冷酷な人間担っていたのです。ファリサイ派の人たちはユダヤ人の同胞を神の民として導く本来の役割を忘れて、自分たちは正しい善人で、罪人を探すことだけに熱中していて、傷ついた者をユダヤ教社会に復帰させることを忘れていたのです。自分は律法を守ることで「できる」側にいて、「できない」「できない」という価値基準で彼らは同胞をいつの間にか切り捨てていたのです。イエスが羊のために命を捨てると言ったのは、エゼキエル書の羊飼いの使命をさらに超えた理解を示しています。囲いの外にも羊はいるのです。そして、その羊も導かなければならないのです（16節）。そのことに気づくためには、私たちが正しいと考える囲いそれ自体を不断に見直す努力が信仰的に必要になるのです。実は、囲いを作って人を隔てているのは、私たち自身であるかもしれないのです。イエスが見えると言いつ張り張る存在として指摘したファリサイ派の人たちに私たち自身がなってしまうことがないかを常に注意したいと思えます。こういう選別は私たちがいろいろな場面で行っていることです。極端な言い方をすることになりますが、このイエスによって目が見えるようになった盲人の目がイエスによって見えるようにならなかったとしても、イエスに出会ったことでこの盲人の人は生きていく力と勇気を与えられたと思います。

大学を卒業したあと3年間北海道で新聞記者をしました。その時、教育担当の記者であったのですが、ちょうど1987年から始まった養護学校義務化の問題が立ち上がり  
2 ました。障がい児は教育委員会が措置する養護学校に入学させられる法律が施行さ

れたのです。未就学の障がい児の親たちは「共に育つ教育を進める」を旗印にして、校区の小学校に入学する運動を展開しました。私は最初、親たちが主張している内容を十分に理解できないでいました。私は障がい児は専門の学校に進んで専門的な教育を受けるものだと思います。しかし、取材を重ねていくうちに、親たちの主張の本当の真意がわかってきました。自分たち親は障がいを持つ子どもよりも先に死ぬ。地域から遠く離れた養護学校で寮生活をする、社会で生きていく普通の力を失ってしまう。そして自分たちが生活している地域との関係性が断絶してしまう。そうすると、地域から障がい者の姿が消えてしまつて。いわゆる健常者も障がい者どうやって付き合つていくかが分からなくなつてしまふ。障がい者と健常者が共生する社会を作り出していくためには、障がい児が校区の学校にすすんでいくことから出発しなければならぬ、という考えから運動をしていることがわかつたのです。

そんな中で、私は既に義務化が始まつていた聾盲学校の教育制度に反対する二人の未熟児網膜症の未就学児の密着取材を週1回の教育欄に連載し始めました。未熟児網膜症というのは、未熟児で生まれた子どもを保育器に入れてその命を助けるのですが、酸素濃度が高いために網膜血管が異常増殖して見えなくなるものです。「祐子と恵」というコラムで毎週書くのは、新人だつた私には結構辛いものでした。通常の教育ネタを書かなくてはならない中で、連載を抱えるのは大変でしたが、そもそも、自分が出した企画ですから根をあげる訳にもいかず、苦勞して書いたことを思いだします。その経験で分かつたことの一つは、私が障がい者かわいそうな存在と見ていたことです。けれども、このかわいそうな存在と見ることで体が差別意識を生みだす根源であるということにも気づかされました。この祐子ちゃんと恵ちゃんは札幌市内で。統合教育をしている幼稚園に通つていました。その幼稚園もまたいろいろな障がい児を受け入れていたので、地域で反対運動にあつていました。障がい児が自分たちの地域に入つてくることを毛嫌いされていたのです。結局、この二人は盲学校に行くことになつたのですが、私は官庁から毛嫌いされて、新聞社を辞めることになりました。でも、非常に貴重な経験でした。辞めた後、ある教育関係の出版社から書籍化の話が舞い込みましたが、それは断りました。

以前から名前だけは知っていた児童文学者の工藤直子さんの詩集を最近買って読んでみました。台湾生まれの86歳の方です。谷川俊太郎さんとか、なだいなださんと一緒に本を出している方です。その詩の中に「花」という題名の短い詩があります。

「わたしは わたしの人生から 出ていくことはできない ならば ここに 花を植えよう」という大変短い詩です。イエスに癒された盲人に尋問するフアリサイ派の人たちは盲人をユダヤ教社会から排除することに悪意があつたわけではないでしょう。盲人は罪人だから通常のユダヤ教社会から排除しなければならぬと大真面目に考えていたのです。けれども、そのように考えてしまうことで、盲人の目が見えるようになってユダヤ教社会に復帰することができることを喜ぶことはできなかったのです。私も腹部の大動脈の手術の合併症で死にかけて、今は足が不自由になっていますが、今の人生から出ていくつもりはありません。私たちは目に見える障がいを抱えることもありまじし、目に見えない障がいを抱えることもあると思います。困難に向き合わなければならぬということもあるでしょう。けれども、私たちは、自分の人生から 出ていくことはできません。そうであるならば、この自分の人生に花を植えることをしないではいられないと思うのです。幸いに、私たちにはイエスの恵みと導きが聖霊によつて与えられているのです。どのような花が咲くかは神の御心ですが、植える行為を続けるのは私たちの務

3 めめなのではないでしょうか。